





藏玉和語集

草木異名

并月之号

加賀御草 大根

年自記

さび草乃中よもぎやきり見草やうへ虫洞よもぎ草

正月一日大門より餅のうへよをく大根之

初代草 門松

月

大内やもあふの初代草よもぎを人よあまらるる

正月二日大門より植松之門松事也

初見草 松

天智天皇花書

年おとよもり乃色も初代草まうらうの草あまらるる

千代若草 若菜

日
いひふも多や摘んば花は多由個の程乃教をりて
根白草一芥

日
下くに立派とて花よ根白多はばじ我袖よ香をりつ
香散見草 梅二日中旬梅

日
山里のわくふさげらかきふまよふをりて誰れんやえん
尋深草 楊 ま木時最相違有順徳院所作
あての梅より七日先三つく吉野有
雲井梅トモ又人丸梅トモ

日
わづく昔神の心乃りらまはれりうへよあつて云

日
丹宮前越合花盡夫名 **風見草** 柳
あまきまの梢は風をまのよはもさくららうひん
去薄 日

日
わらぬの露よみらるる春乃植は枯れ風をりて

日
風見草 日

日
松よのさむらひの風をまよふあもみされつと

日
可高草 日

日
天智天皇花盡夫名
浪よ吹付はりて花の川をまよふあもみされつと

日
尋見草 楊

日
植ゑてよとくやえんさあやあすを志すあもみされつと

日
他若草 日

日
あもみされつとくやえんさあやあすを志すあもみされつと
他若草 日

花名草紙

花名草紙 西見山の日向草

日向草

日向草ニリ神ヤリケシト詠セル松ノ一

山里乃あききねの花の日向草花ハナキナクナク花名草紙

一夜草

天智天皇花名草紙

一夜草の夜さきつらふ花と梅今いぬ橋ん

即志の昔物語アリ須徳院卿作

引く或人道をゆくよまきうひて廣野

をきりてまのち中さくもの子をひらむ

ぬおれを種よ入て草の根を引む

てその根ハ種ふしぬあまらん

ひつらうい子ハ草生の子也

ニ

日

日向草の草はよらんとて夏は美ぬ夏
こらやうこらやうぢらぬあはふん
一あつあつひらり花のさぬ今花
あはれ
野ニヨイテ男又彼後三様我オソ種一草陰ニ
アリケル由ニテ件ノ野ヲユクニヨイモトメケル文鳥
ノカイヨアリ是ヲ取テ帰テ彼スミレノクニツナリ
命をよひて行む一葉を月や花のさくよ
は草を人えくれもつるかへくをき
てよめく独見く

一葉草

二葉草

二葉草今ハナク人あらん月をまねの花は

世々よりして彼社乳の量よは年々増え
けふも彼因縁を思ふ

三回草拵

天智天皇花名

橋ヲ去リ部ニ年ハ元日橋葉ヲキナニ水合ヨリ春ニ

大向や名もしりまき三回草の家化するかけう久き

の敷いしともみなのとすおきうり色

四回草日

日

六の時の方と八角と花まりあて回草は花八味分り
八角と六治世のしり

花見鳥名

泉次ハ紙出夫名

去るや比し流り山里の野よきとさけふ色丸も

三

大取草日

花さけし秋うとそ思ひらあまるよもり花とまへん

二季子鳥名

唐琴詠ハ吳名去林由本物

いゆをなるとそ二季子鳥年よ二ふゆさうらん

二季子草拵

曾丹詠ハ去及ニカル者ナレハ二季草トイフ

常船や名もしりまき二季草の松よのこをうかす花

紫草日

天智天皇詠

松の枝の緑もんくもかりとるよ東あめはのていさよ

松見草日

天智天皇詠

りよやうあめはまもきあはら松あまの花あはら

日

御士忠草

予は昔竹ありあけの代をへて月や昔の夜よりん

天智天皇
天武天皇御酒古草

飯人や文を送らん酒古草より人の齡の心よりせん

日

三千代草

夕母は酒にけりてのむらや三子あはれをよみせん

西王母の桃のまじ

しらとせよをうてふ桃のとらふなうを

日景草

程許て秋やまつん天の日影のまの夜よりぬま

四

日

天川原の苗代也

山根草 蕨

山根草はつて山らの人よみあはれをよみせん

面鏡草 山吹

故の面鏡草より夕やとめやその名跡なりけり

昔男女あはれすして別ゆるる時鏡の面

鏡を二手にけりては鏡をうつと早そ

所より山吹生かけるとき巨細忌衣代相

語よりん

昔大和国奈良原ト云所ニアル男山城国ト云リ

ニスム女ニカヨヒケリキノ志不淺而ニ子親シカリ
テ初彼男女云ケルハ志雖深切今ヨリハ會更
不可叶ト云テ鏡ヲ取出テキニ面敷シウツシテ若
并更アラシハ鏡ヲホリ出スヘシト云テ籬ノ下ニ
クソハ後ノ年ノ春ハ所ヨリ歎冬生出タリ男
アハシニ思テ不斷此所ニ獨スミテ歎ケル親ハ
更テ同ヒテイテ鏡ヲホリ出テトキテ又ウツム
其年ノ秋又ハ所ヨリ槿花生出タリ其時ハ男
サテ他ノ心アリトテ忘ケリト云

鏡草

日

初見草 卯花
西教をそらひよとやしかへんを忘衣乃ぬれうほ

子細日草

夏

初見草 卯花

天智天皇
初見草 卯花
たろとあまに時多立田心乃里よみ候り

雲見草 日

おろりたり我袖ぬきて雲見あまはけう雲よつじぬか

埴見草 日

郭公さそやさささかきみまはれ嘆よをり心黒むと

形見草 葵

日

日

昔よりいりてむの嘆がしこかきあまの心は
唐の王あまをこのみりて百あまをうくれ
たる中よあふひをゆかり崩津ありし
記よ皇子はあまをうみあまといひぬき

雲身草 あかり

日
心とをこりていりてあまの心は

白苔草 杜若

命をたぐふ
友あまの心は中よあまの心は

石竹 梅子

命をたぐふ
唐よありけりいりてあまの心は

昔玉よ鳥田の時よと云勇士あり昔
此山に一の石あり彼石に灵あり人をか
やます何時主件り石と射則箭なら
平そ箭めけしとて花さくよ平は花
梅よとて是は花りさかりてゆくとき

庭古草 梅

天智天皇
命をたぐふ
庭古草は昔の庭古草よさける花の

昔草 日

命をたぐふ
代をて宿荒り昔あまの心は

秋待草 友田

基後出 水うけし秋の草よりなる一花の白くはかばか

水懸草 日

天皇花冬名 古田の面々秋の水うけ草は菊の花より

池見草 蓮

日 びじうつと花のよもひはあはれなりし草葉は

露地草 日

ういさつと花や咲ん露地草はさうさうと花の葉は

水堪草 日

秋のつと波とやみん水堪草はさうさうと花の葉は

水堪草

後水

水うけし秋の草よりなる一花の白くはかばか

六月廿五日雨の吹なすをまゐる泉

水堪草 松

基後出 信古や花のあはれなりし草葉はさうさうと花の葉は

信古のまを里に五位の松と云ねありは松

とつと花と咲してすうさうと花の葉は

心をとまし葉をさうさうと花の葉は

いとおほく人なりは葉をさうさうと花の葉は

の松けあはれなりし草葉はさうさうと花の葉は

むはよなりし菊はさうさうと花の葉は

松ノ実名ヲ夏部ニ被入奉不得意但被移
現セシ夏五月也仍夏ニ被入凡 夏松 俊頼朝
住吉ノありといふ方ノ藤原菊也秋の馬場テ

天智天皇元天智名
氷室草 葦

難波はあつたといふころ少室を代へりてあつたといは

万葉
吹喜草 菖蒲

大内や玉の影うらあやまおぼくろよ世よひのれやじ

光草 紫百合

有りてと云つるまのゆけは花よ松とあつたひの葉を
氣を始百合と云ふる事ハ可成堂火借

あまの面をうんを書り本をうんて月事と
云假まへ

火借草 虫

和とてに川やの波は火借を月あつたよと云ふは
是ハははらうらなと云ふる事也

夜半草 月

よるあまをん川のよを言にけり事ある月出あり
不加見草

万葉
名斗はさきくもあつたつち事秋の比と云ふ事也
け花乃さく日敷世也仍廿日事と号

且見草 まきこ

又らぬらあさきの心は蘇なる後あつて泥は且見草

名取草 牡丹

天智天皇

お入らぬらあさきの心は蘇なる後あつて泥は且見草

昔あつた女は花をあひひしつておぼくを
きくて昼は終日よがら先きき夜は終日
よ可損事を致さるよよりて男地公
ありとて離別したり終あつてよき
ひしきくもとのあつてすみけるをん
仍名取草と号

九

夜白草 大豆

天智天皇
花尽名

雪の面よ雪とくも教白草なりそめりもむの夕ハ
乞を牡丹といふ祝あり大ニ不審い可心す

了簡

山前草 大角草

天智天皇
花尽名

いさよまの山前草はひけり花はけり雪とてぬを
散と理草 小角草

秋はくも風はやらんきりも花のあつたはむ五月ぬ

涼草 草花

鳴蟬心のあつたはむきりも花のあつたはむ五月ぬ

子訓草

日

てはれ草人のこゝろをけりてあはれと海のそとにけりて

風玲草

臣着草

約きこころをたれや風玲草てあはれと種は月う草し

風字草

丹文花名考

とくあはれとけりて風字草はあはれと種は月う草し

秋

初見草 萩

天智天皇花名考

病も色あつ初見草はあはれと種は月う草し

庭見草 日

十

日

垣はよあはれとけりて庭見草はあはれと種は月う草し

古枝草 日

西行

美木枝はあはれと色あつ古枝草はあはれと種は月う草し

秋草草

金元

秋はあはれと色あつ秋草草はあはれと種は月う草し

江深草 日

丹文花名考

花はあはれと色あつ江深草はあはれと種は月う草し

露草草 薄

西会花名考

我々のあはれと色あつ露草草はあはれと種は月う草し

お茶鳥 麻

后馬羽院冲并

ふくれゆるそつるのふりおまもみらの衣をわび

天智天皇花尽吳名

花の神のわびて忌 病やまよりけはかみのと乃神と

林知草 日

後漢并

心下草 日

夕冬乃心下草の心わたり松さすますまはひと

風持草

丹波花尽吳名

男草 日

なりの地はあまのぬきまはひと心わたり松さすますまはひと

坊川院冲村ま木う合うん時吳名

忌のます又音のまの男も風乃とありれとあまけ

祢覚草 日

林といふぬるよまも祢覚も凡や兼路の園とゆん

同連草 日

二条院撥成并

音信のうさ地なうう白連も祢覚をさそふたり

農路草

天智天皇花尽吳名

花乃名の子種の中は流流も命をうしる流やあ

八月中旬千種

色無草 松

なくあも常盤のふある色をまらうと流乃も林守

中甸下被定事草木時節相為 記三順住院沖撰

松ヲ色なきこと号テ秋ノ部ニ被入奉者有来
 吳名ヲ被命後鳥羽院御時立田山寸雨モ色無来
 凡ニ秋ノ音ヲキクラン依ハテ被入

松無草

母久花冬吳名
 去ニ此花をむく所ノ松無草秋ノ落乃御より此

忘草 芭蕉

日
 以月ノ名々屋カん忘草花ヲ瑞のとも大おけ

夕氣草 檜

日
 若いハ初乃草の用がくた夕氣草といふらん

鏡草 日

基後評
 明くさつとゆあつゆふの鏡ままにたてけり

思草 女郎花

それらつさつ神の原の思草昔もなほとて秋の思ん
 今ハ色ノ物終ニナリ
 女郎花を思草といふハ母後世に
 乃ちまはしきよもみしり天智天皇も花也
 若いハ高とさり又志をんとも不分明但
 ともまへしを思草と云とて彼葉裁合
 小定く何れ糸勿備之又標をとも能因

以ハ詠せり

忘草 葦

堀門院吳名三アリ

お色よ花さくを忘るひの秋なるにまらなは

いとれまの事わらゆる忘るはな

あまゆるとりの又くわんきうを忘る

といふは後教へ極をよはり

私助 後教光り力ノウキヲモ今ハ忘草
凡吹千ラ八余アラシ

色見草葉

順徳院冲弁

秋もくはるは乃色見をらるゆ惜さ山凡とく

妻恋草日

川

をく心なくおはなく庶乃妻恋まの色よはり

錦草月

日

三田山松をそりぐるおはる時ぬてまはり心乃よと云

百夜草菊

天智天皇元元冬吳名
名やねふ翁うな

大和国三輪里ニ老翁アリ皮をニ幸ノ菊ヲ植テハ

翁ニテアソフハ菊秋冬ニテ春夏ニテモ花モ葉モ

カハラス所ノ者不審ニテ委尋ず自七月一日毎

夜菊ノ下落ヲ黒物ニウクル一ノ百夜之毎月ハ花

ヲ並依之ハ菊四季ニカリス仍百夜草也

水懸草

七月十日昔ノ水

をれはくくくやわらん年毎水はるのあは

星見草 菊

唐柳 色満くらくてふ色やりのままうらぬ色を離れん

日向水

七月十五日水

今日といふく代り人の日向水あまのこゝろ

夕玉草

竹露

月まきく夕玉草の秋風をひらけり

川玉草

竹

秋風をひらけり松がまを川玉草とゆふ

水竹草

竹

天智天皇花名 水竹草 風をひらけり

月

形見草 菊

われせとつて今もあつたか

い菊の奥列新妻里ニアリ因縁を常之新妻

ト云物語ニアリ業平作是ハ菊ト云ニツキテ

秋ノ部ニ被入レは物語ニ十月五日トアリ

然者冬丸

冬

初見草 冬菊

去くれあつたよふしゆり

い初見草ニ説ニアリ 寒草雪トイハリ

今胡コソハを山松ニ初見草サスヤ日新ヲク
モルト思ハシ 寐蓮

夜ノ程ニ秋ノ立枝初見草モトニシ秋ノ色モ
ノコラス 頼政

初見草 日

いづくへし松の本ひけりおんまうかん時をいれき孫

雪草 日

西の方
きれよよのやまの雪こま秋よあまのれをわたり

秋草 日

天智天皇花冬未名
花ちりてそのまくりは秋をまじりてをけ今の病玉

日
初名草 冬

万代はさける中あしおなまをまもりてや花をみん

鏡草 冬

はるくもりさるもりかろまおのあま水の花名

水面鏡

日のけは水たふれ家をころがれ想

名を契成川よありを詠せし所

未及見

親子草 冬 又ハ名ハリ葉

年とよははたむる親子あまのまじりて人か知ん

師光可

六花

冬瓦よつれしらく六花の香は神よ雪の如く
六花の中委和哥新論抄に有俊房
作

春は二梅極 冬は則三冬雪

秋に一菊 夏卯花雪ありと云ふ

白雪のしる依為ふり六花よ六不入

雑

豊高合草に

大智天皇元名

川とくさくさくはる宿のともくも風よまがはす時

日 月 日 月 日

豊千代草 日

松のよみ人かる時を去り世も久しき宿のなほ

延喜草

夢のや雪のほりひとまよ花咲おけり雪を花

夕見草 日

松よぬれしよとせつ夕見草月やあふり花をゆん

朝見草 日

秋のあま月をよむる物見ますと云ふのこを秋見草

折見草 日

をうま枝よあんとよせなぐさな枝よ今見草

時見草 日

多かりしも花とくくと時見草なるものぞを悟る

物見草 日

物見草はうさぎのしりしは海をたぐも花とを

目見草 日

心裏の暁とみ松風や目見草の枝とがかり

夜見草 日

何ぞとて枝とみおん夜見草の心のかよとて枝と

悪草 日

るなとて子来やあん悪草の枝と神の使の

同連草 日

月あつてぬるも同連草の枝と神の使の
凡そよとての枝と来よとての枝と
とくも或はらひもは連草の枝と
枝と向るもをく枝とよとて文字を
よとて枝とを近來枝南尺とてやあよ
ひつすともあつて

異名

岩野草 日 梅
河とての草 日 松

風侍草 日
龍田草 日 紅葉

常盤草日

富草日

草草日

曙草日

くさく草日

文見草日

風聞草日

玉見草日

日草日

富草日

童作抄三有

此代乃稻の若天神の所田あまの里なる田よは
さのをのするあまのぬ地あゆをく明地と
浪名あまのをくまかろいぬせとく人
編して飯よますをく

なれ草日

夕敷 彦行院

志の草日

んれ草日

十八

千八見草日

よまひ草日

れり草日

葵草日

野辺ノ昔

昔陰必ニ兄才あるもの世よあひわひく
才ハ統はあひりり牙若残を播別々々時
兄彦前乃菊を一本を二よひつる
くじけりハ牙よび菊をんくかくむへ
しとひひり才統はあへもりつる下向く
けくをう人なりけ菊二よかしくりり
もく枝るり小記さけるかん

不名雄男鳥

擋鳥日

鴨川院名

青羽鳥日

鴨

なつぼ木鳥鳥

鶯

れんざりぬる鳥

そりか男

日も沢鳥

日本紀

いへ鳥

足かき鳥

くま鳥

都玄 奥義我集

こ井鳥

龍兼記

孫鳥

小花鳥鳥

鳥

ふと鳥

鳥

ちく鳥

水虫魚

魚

の鳥

鳥

細鳥

荒鳥

男女中身ノ排 日本紀

奥義抄

玉鳥

将鳥

イニチキ 神示ノ譜アリ

まとお鳥

あ鳥

腹ヲトス 日本紀

お鳥

あ鳥

ハニカトモモ 電傳抄

さ鳥

鳥

あ鳥

足鳥

鳥

天下んくむ鳥

その乃鳥

の度鳥

く鳥

あ鳥

鳥

あ鳥

鳥

鵬鳥

鵬胡鳥

鳥のう鳥

ゆ秋の末よまねともふりりりるをせざるまぬい
つとゆへお雲乃をををせくはゆふの
鳴都すうさひしうりはあよぶうり
とりと云統あり

きとく海士 ふとの海をひのころいふまゝにけい
きとく云具のあつり

常神 まのぬりる衣の神く赤小神もろ周衣の
金玉抄

まひさく あいのつら紫乃らひいふのくむを
和音新論抄ニアリ

さひひす さひひすまはく心聖のませりうらうら
もせりうらうら

サ

かく植 竹植
奥義 ふしむにけりうりかぬまうらうら
おれんををれまら
やまう やまうはくはる乃毛を木よんまみえく
田よ立ゆるを云く麻うらうせしうま

童蒙抄ニアリ
歳乃葉 歳初又毎年
一字抄 とこいぬま ゆ年のまといふ

おひ おひはくはる乃毛を木よんまみえく
田よ立ゆるを云く麻うらうせしうま

もかり 縮妻ノ事
野辺ノ音音 天のそ秋鶴 七タノ天ノ
はる初六日夜 松のそ 本葉抄

さなけの 秋約 はやかひ あさひ あさひ

あまの 月 つくなみ あまの うら

さくせん 浪名 白玉ひね あまの こや 古堂
大和物記ニアリ

あつぬ雪

ゆき

十

山人

仙人

尺八

梅つさ花

冬梅

河一ろ玉

大鏡有

里舟

車

波車

河舟

石便

式論アリ

ありじ

約日

かし

筆

公乃

淡

硯

心の便

筆

公乃

鏡

あひ

ま

蓋

又ハツイテ

公乃

鏡

心のま

あり

泉

作

一葉

桐

足

先

毎名抄

十二月異名

付花多 隆冬 奇 玉用 之 月 畧 之

心

初寒月

霞初月

初春月

リ

自可集勢出

雪のれ ありとく けり 三 雲 公 乃 初 寒 月

御製

宅家

今日も 初寒月 雪のれ ありとく けり 三 雲 公 乃 初 寒 月

家隆

霞立 初寒月 約 自然 乾の こと 色 なる こと

二

梅見月

小卓生月

衣更忌

有家

ふんがら 梅見月 風の 情を 袖よ さら

日本紀

昭昭

日
緑たけけよちあきし小春まじり給えりしうき世の春
さゆ姉乃たよ處の衣更着なりき日影も月影も

友

三 花見月 梅月 春惜月

雲雀

御制衣

万

うき世も云々よひのりもさる月あてん公もあてん

乞家

日

あてんも雲とてて梅月をも雲のりつて雲とて

家澄

十二

日

九月三月 中三三三三三三三三

ねえめ身も思ひも目もさる世のりつて雲惜月

卯花

四

卯花月 得鳥羽月 ちん残月

郭公

長明

日

うき世も云々今もさる月あてん公もあてん

有家

ねえねえあれあれあてん公もあてん

万

佛製衣

さる世も云々の名もあてん公もあてん

五 柚 賤男深月 月不覺月 橘月
水鷄 吹喜月

日午紀

いさくて菅の小笠をきくしゆん志つゆのきぬ月鳥の跡

三之歌

歌昭

みよぬのれきとそめきよりや月とす月といひくめん

歌隆

そくたり御月乃君をそめて志の音のきひきかん

長明

サ三

時高初冬の始に吹ぬ川花あけぬよをらうりきけ

夢莢

六 惣 風待月 明電月 常月

顯昭

松陰よ原君をうつと命をや同約月の及りて

三之歌

夏雨は狂えやうてるお井の月よと成ぬまき言ふ

御製

しらんくひいしおふるせん常の月約えら花枝を

日 万 日

書夜

七

文枝月

女屏日月

有家

七夕の星の光をよみて書あくる月をい

秋澄

よりのよりの橋のたもとに七夕の月をい

秋照

七夕の星の色よみてやあををいすもをい

八

秋風月 月見月

紅葉月

鳥

廿四

日 日 日

定夜

秋の星よよみよみてあををいすもをい

長明

あゆむる秋の星の光とあつ月をい

有家

あつ月の光よみてあををいすもをい

秋三月の中トリハキ秋トキハキ月

九

紅葉月

小田莉月

秋葉月

立田山まかくてくおはとくやあををいすもをい

日

さひとひ晴立くけりあけのけりしとて小田の月

取眼

家隆

万

とく床をちりて北の孫は月林よとてあきさき

時四月

十月

初親月

菊十

乞取

月

ちりてし木葉のけりし月をのりてあきさき

顯昭

日

秋の是のけりしとてあきさき

サヌ

万

まも木と初親月のけりしとてあきさき

長明

不審

カウタニ

落葉

十一

親降月

神楽月

雪見月

御製

凡そと親降月のけりしとてあきさき

定夜

志しとてあきさき

有家

万

くもりとてあきさき

梅十二 去月 梅初月 三冬月
鶯

長明

日 昔々の年八月の月... 荒れ去る月の... 祭

顯昭

月 世にまじりかじけうと月の... 梅の月... 名を...

定夜

月 冬三月ノ中ハ月ヲ冬ト号ス
去る月... 三冬月... 不... 名...

以外月異名... 詠歌... 名者
自日本紀 并 万葉集 勘出 也可...
自余者皆以證款不分明云

此一卷者自室町殿麻光院殿草木異名事依被
二条殿巧政良基云
尋申被註進清書之時密之寫苗者也

元祿十四年辛巳正月

海陽書肆

栗山守三郎梓刻

廿七

